

東海大学出版会

森岡健二 著  
藤永保

## 『言語と人間』

国語科 生田勝彦

A 5, 262頁, 850円

本書は、3部から成っている。第1部「ことばの生活」は、日常の言語と事実との関係から生ずる諸問題を一般意味論の立場で森岡健二氏が考察し、第2部「ことばのはたらき」は、人間の言語の特質や機能を言語心理学の立場で藤永保氏が追求している。第3部「討議」は、日常言語の機能とその活用の問題を言語教育の課題に焦点をあてながら一般意味論と言語心理学の立場から両氏が言及したものである。

第1,2部はともに、商業雑誌ではあるが国文学の専門誌「解釈と鑑賞」（昭和41年1月臨時増刊号）に掲載されたものである。わかりやすい内容である上に啓蒙的であるので、本校の学生なら一般教養の書として十分に読みこなせるものと思う。一読を薦めたい。

以下興味深く読まれるであろうところを第1部を中心に紹介してみよう。

私たちは、名を知ればその名が付された事実まですっかりわかったような気がして、それで満足する傾向がある。名を知ることと事実を知ることとは違うということは知的に理解しているつもりでも、無意識のうちに名を知ることと事実を知ることとを錯覚を抱くのである。たとえば私の場合、「春の七草は」と問われれば、「セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ」と即座に答えられるし、これらにまつわる多少の文学的な知識も持ち合わせている。しかし、実物を並べられてそれぞれ選り分けるよう言われたら、正解できる自信はない。私が理解している

ものは、言語による知識であって実物そのものについての知識ではないのである。まして、目で確かめにくいものや確かめられないものになると、知っているものは一体何かということになる。たとえば、諸君たちがよく口にする電子・原子・原子核・中間子・原子力などといった場合になるとどうであろうか。私が七草の名だけ知っているのと同様、事実について知っていることではなさそうである。

物事を言語的な知識で捉えるということは、物事を事実即して捉えることをしないで、その物事にまわりついている言語（内包という）によって判断あるいは思考することである。たとえば、ホトトギスを理解しようとする時、ホトトギスという名から頭の中で思い浮かべることができる「カッコウに似た鳥、テッペンカケタカ、絹を裂く声、啼いて血を吐く、一声千里、初夏の風物」といった内包で捉えようとするのである。したがって、「〈男性〉は理知的で〈女性〉は感情的だ」とか「〈このごろの若者〉は衝動的だ」とか「〈自由〉とはすべての束縛から解放されることだ」とかはよく耳にするが、これらの判断は、いずれもくゝを付したことばの内包を述べているにすぎない。これらの判断が事実と完全に一致するといえないことは、具体的な個々の例を思い浮かべるだけで十分である。要するに、内包はその人の心の表出であって事実ではない。事実と一致することもあるが一致しないことも多い。

このように物事を言語的な知識だけで理解しようと

すると、いろいろと問題が起こる。内包は感情的なものであるから内包的思考は人によって千差万別である。したがって、内包的思考によって〈自由〉とか〈世界平和〉とかいったことを議論しても、所詮むなしなものである。意見が違えば水掛論に終わってしまう。それでも自説を通して相手を黙らせるためには、力関係しかないということになる。そこで鉄パイプか手錠かと発展する。

さらに困ったことには、ことばの含んでいる内包はその人の心の表出であるので同時に価値づけも行なわれることである。それが、黒か白か善か悪かというような二者択一の判断、つまり二値的判断になってしまうことである。たとえば、「Aはアカだ」「Bは封建的だ」という批評的なことばの示すとおり、〈アカ〉あるいは〈封建的〉と銘打たれたら、AとBの実際がどうであろうと、Aはまったくの危険分子、Bはまったく非民主的というように、複雑な人間がただの一角で塗りつぶされてしまう。ことばによる価値づけは、「いい」か「わるい」かを裁断して第三者の評価の入りこむ余地を残さない。要するに、事実を目を伏せて十把ひとからげに「いい」「わるい」で片づけてしまう粗雑な評価にはかならない。前に例としてあげた「男性は理知的で女性は感情的」「このごろの若者は衝動的」という表現も、「だから男はものわかりがいいが女はあつかいにくい」し「このごろの若者はダメ」という評価につながる。ひとりひとりを見ていけば、これを一括してそのよしあしをいうことは到底不可能であることぐらいわかるはずであるのに、つい安易にやりがちである。二値的判断の弊害は、全面肯定か全面否定かのどちらかで事実を観察し、当然発見できる多価値的な面を見失ってしまうところにある。事実を観察すれば、全面的にいいもの、あるいは全面的にわるいものは存在せず、何事にもいい点もあればわるい点もあることに気づくはずである。

事実を見ないでことばだけに頼って考えると、粗雑な一般化・全体的判断・二値的判断・誤った推論などどうしても独断や偏見に陥りやすい。なぜこのようなことが生ずるかといえば、もとをただせば、ことばと事実を同一視するところにある。それではなぜことばを使うと事実との同一視が起こりやすいかといえば、これまで述べたようなことばの内包だけで考えてしまうことのほかに「である」ということばの判断形式も原因となっている。

たとえば、「太郎は長野県人である」という判断形式がある。私たちはこれによって直ちに実際の太郎と長野県人とを同一だと錯覚してしまう。つまりイコールと判断するのである。「次郎も長野県人である」といっても次郎イコール長野県人と判断して疑わない。「ゆえに、太郎＝次郎」というところで初めて考えなおそうとするのである。要するに「である」という言

語形式は、2つのことばを結びつけてはいるが、決してイコールという同一化の関係で結んでいるわけではない。「言語的にいえば〈太郎〉ということばは〈長野県人〉ということばのワクに入れられる」というように、2つのことばのカテゴリーの関係を示しているのである。この形式では、主語が必ず含まれるものを示し、述語が必ず含むものを示すのである。

「太郎は長野県人だ」と単に言っているだけならよいが、いつのまにか長野県人の持っている特質を太郎が持っているしまた持っていなければならないと考えることがある。そして、長野県人に関して抱いているイメージ（ことばの内包。たとえば、思索的であるが理屈ばい・郷党意識が強い・教育熱心といったもの）を太郎に押しつけて、典型的な人物像を作りあげてしまう。言語的には、「太郎は長野県人に含まれる」「長野県人に所属する」「長野県人に分類される」というように範疇体系の中に位置づけをただけのことである。長野県人についてのイメージにしても、決して何百万という県人のひとりひとりを調べた結果でもなく、1人か2人の知人についての印象から類推して一般化したものにすぎない。事実ではなく推論である。したがって、この推論をもとにして「長野県人だからこうだ」というふうに自分のイメージを押しつけることは、実際の太郎とまったく無関係な人物を作りあげることにもなる。

「である」のもう1つの用法、すなわち「そのものの一部に……という性質を含む」という断定的な表現にも注意したい。たとえば、「葉は緑である」とか「彼は勇敢である」とかいうように、主語に対して色や性質状態を表わす述語がくる場合である。これは「葉は緑という性質を含んでいる」「彼は彼自身の中に勇敢という性質を持っている」という意味である。厳密に言えば、「緑」や「赤」その他の色が客観の世界に存在するわけではなく、私たちの知覚がそのような抽象の仕方をするだけであって、「私には緑に見える」ということにほかならない。また、「勇敢」とか「卑怯」とかいう形容語にしても、それが客観的事実として存在する性質として記述しているわけではなく、私たちの主観的解釈を表わすことばであることはいうまでもない。ある時、ある場所の彼が、私にはそう思えたと述べているにすぎない。とにかく、色とか性質状態とかを表わすことば特に形容詞形容動詞は、事実を述べているようにみえながらも事実そのものを記述しているのではなく、発言者の推論を述べているのである。したがって「その音楽家は神経質だ」「文化人の言動は無責任だ」というようなことばを聞いても、事実と混同せず発言者の心の投影つまり推論として理解する習慣をつけたい。

ことばへの盲目的な依存をやめて、まず何よりも事実を尊重するようにしたい。そのためには、直接経験

をできるだけ利用する。話をする場合にも、実物・図表・グラフ・写真等資料を用いて百聞よりも一見することに重きをおくようにする。理解する場合にも、ことばによって一般化して考えず、実験・観察・経験を通して個別的に認識する態度をとる。抽象的なことばで安易に結論に飛躍せず、個々の事物や特定の状況の中で考えるようにすることが必要である。

第1部が順序を追った段階的な論であるのに対して第2部では、興味ひかれる多くのデータに支えられた個々の研究報告が展開される。そこでは特に言語と思考の関係が面白く書かれている。

アヴェロンの野生児・インドの狼少女・施設の児・双生児・健忘失語症患者の場合、それからことばを覚える前の幼児と同年齢のチンパンジーとを一緒に育てた場合など種々の実験の結果、言語の発達が知的発達をうながすという結論が示される。

動物のことばの章も面白い。ここでは、トゲウオ・ニホンザル・カラス・ミツバチ・ゴイサギ・オオム・チンパンジーなどの観察例が引かれているが、作者は次のように考察している。動物のことばは、対話の機能を果たすようにみえても、それは相手の行動が他方の行動を触発する信号刺激の役割を果たすからでありたまたまタイミングが一致しているにすぎない。つまり、本能的な行動の連鎖からなる盲目的な一方的なコミュニケーションだと論ずるのである。

第3部では、言語が人間の認識や思考活動を作る上で最も重要であることを実証し、その結果言語教育のあり方について問題を投げかけている。高次の言語機能を使いはじめたりひとりごとをつぶやきはじめたりするのは、万国共通して5～6歳ごろである。脳の発達の面からみても、人間として一番大切な前頭連合野の細胞が発達してくるのが5～6歳ごろから10歳ぐらいまでの間である。5～6歳はそういう意味で特に大事な時期なのである。また、前頭葉は10歳ぐらいでほとんど発達が終わってしまうという。したがって、家庭や幼稚園・小学校における言語教育（単なる言語主義に陥らないで思考を育てるような意図的な教育）が重要視されるのである。

それにどうしたらよいか、また、10歳すぎからの言語教育はいかにすべきか、という問題についてはアメリカやイギリスの例を引きながら興味ある提言をしている。一読を重ねて薦める次第である。

終りに、日本で唯一の「話し方」の学者である斎藤美津子著「コミュニケーションの理論 話しことばの科学」という本も楽しく読めるものなので、片名だけではあるが紹介しておく。

## 重金属による 大気汚染について

4C 若狭正美

### (1)はじめに

今日、わが国において最も重要な問題のひとつに公害問題がある。先日のテレビドラマの中で「ある調査で“地震が来ると思うか。と聞くとみんながみな口をそろえて“来ると思う。と答えるが、”では、対策は、と聞くと誰もがノーコメントである」と嘆いていた場面があった。同様に公害問題に対しても、口では“公害、公害。と騒いでいても物価問題の様な切実さは感じられないのではないだろうか。そこで数ある公害の中から大気汚染としての重金属が人体にどの様な影響を与えるかを述べ、公害が我々にとっていかに身近なものであるかを再認識してみたいと思う。

### (2)重金属による大気汚染

汚染された大気中の重金属は場所によって異なるが多種の重金属が測定されている。全体的な経年度変化の傾向としては、Fe、Mn、Coは減少の傾向を示すが、それ以外は増加の傾向を示している。これら重金属の急性毒性の強さは、Hg>U>Cd>In>Se>Cu>As>Ni>Zn>Ag>Sn>Co>Mn>Pb>Crの順になっているが、慢性毒性については、これから判断するわけにはいかない。また、金属単体よりも化合物の方が毒性が強い場合もある。そして、これらの有害金属は主として非鉄製錬工場の焙焼炉、溶鉱炉、転炉などから排出され、大気を汚染し、一部は沈降して土壌および植物体を汚染している。そのため、排出基準を定めているが、地形および気象条件によって汚染のされ方が異なるため、福島県ではさらに上のせ基準を設定している。

### (3)重金属の摂取と蓄積

環境中に存在する重金属が生体の中に取り込まれるのは、一つは空気中の重金属が呼吸によって肺内に入り、もう一つは、飲食物に含まれる重金属が口から消化器管に入る二つの経路によるものである。したがって空気中や飲食物中の重金属濃度が高くなると生体への取り込み量も増加してくる。人間は1日に約1.5kgの食物をとり、約2kgの水を飲むといわれている。また、食物がなくても35日間は、生きており、水がなくても5日間は生きられるという。しかし、こと空気となると1日に約13kgという、食物や水の10倍近い大量を摂取し、5分間の呼吸停止によって死亡するので

ある。この様に重要な空気が汚染されていると呼吸器、体内の細胞、組織、器官に影響を与えることになる。肺に入った金属は、その一部が血液中に吸収されて全身に運搬され、鉛では骨に多く蓄積され、カドミウムでは、腎臓や肝臓に多く蓄積され、残りは、し尿から排泄される。この吸収量から排泄量を差し引いたものが体内に蓄積されることになる。一方、消化管に入った金属は、その一部が門脈を通過して肝臓に入り、これから血液に流出して全身に運搬される(図1参照)。この様に金属の侵入経路によって体内への運搬様式は、いくらか異なるが最後は血液によって全身に運ばれ、金属の種類により蓄積される器官(場所)が異なってくる。例えば、Cd-腎・肝臓、Hg-腎臓・毛髪、Cu-肝・副腎・脳・骨、As-毛髪・爪に多く蓄積される。

#### (4)重金属の摂取量

さて、人間は日常生活においてどのくらいの金属量を摂取し、吸収しているのだろうか。鉛およびカドミウムについて取り上げてみよう。

まず、鉛についてみると表-1の様なデータがある。これによると、成人では1日に都市の喫煙者と非喫煙者は、それぞれ41 $\mu$ gと31 $\mu$ g、農村の喫煙者と非喫煙者は、それぞれ31 $\mu$ gと21 $\mu$ gの鉛を1日に吸収していることになる。もし、ここで鉛による大気汚染がひどくなれば鉛濃度がそれだけ高くなり、吸収量も増加することになる。ところで、産業その他からの鉛汚染のなかった時代、すなわち全くの自然環境下での人間が1日に摂取していたと推定される鉛量は、1日に食物から20 $\mu$ g、飲料水から0.5 $\mu$ g、空気から0.01 $\mu$ gで、体内に蓄積されていた鉛は体重70kgの人で2mgである。

ところが現在は、体重70kgの人の鉛蓄積量は約200mgといわれており、これは鉛の環境汚染の結果であろう。

次に、カドミウムについてみると、アメリカの成人男子は30mgのカドミウムを含有しているとされている。カドミウムは、生まれた時には、生体内に見いだされないことからすれば、この30mgは、生まれてから体内に蓄積されたものとして計算すると、毎日平均3 $\mu$ gずつ蓄積されることになる。日本人成人の1日のカドミウム吸収量を計算したのが表-2である。これによると1日に7.8 $\mu$ gのカドミウムが吸収されていることになる。

#### (5)重金属の蓄積量

鉛にしても、カドミウムにしても吸収された量そのまま体内に蓄積されるものではなく、その一部は、し尿から排泄されているので実際の蓄積量はこれより少いことになる。日本の正常人の尿中カドミウム排泄量は0.1~14.0 $\mu$ g/lという数値が報告されており、正常人の尿中カドミウム排泄量についてはほとんど資料がなくドイツ人で1日に150~300 $\mu$ g、アメリカ人では200~400 $\mu$ gという報告がある。尿中カドミウム量の

大部分は食物中のものが吸収されずにそのまま排泄されたもので、吸収されたものが腸や胆汁を通して排泄されたものが、どのくらいであるのかわからない。しかし、動物実験からみるとカドミウムの尿排泄量は尿中のその約10倍くらいで、カドミウムの排泄主経路は尿である。これは鉛についても言える。また、表1と表2から、鉛やカドミウムの吸収は、いまだ飲食物によるものが主体であるが、肺から血液中への吸収率が消化管からの吸収率に比して大きいため、空気中の金属濃度が高くなれば吸収量は大きく増加することになる。さらに、大気汚染ではないが煙草からの影響が意外に大きいことは、注目すべきことである。煙草中のカドミウムについて、次のような報告がアメリカで発表されている。アメリカの6種類のシガレットを20本入りの全部を分析すると平均22.7 $\mu$ g(18.5~28.0 $\mu$ g)のカドミウムを含み、その中の16%が灰分に、15%がフィルターに含まれ、残りの69%が煙の中に含まれているという。煙草には鉛やカドミウムのほかにも他の金属を含んでおり、このことは十分考慮すべきことである。

#### (6)人体への影響

この様にして、生体はその生活環境から金属を取り入れているわけである。これら金属には人体に有害な物が多く、これまでとりあげてきた鉛、カドミウムについて、人体にどのような影響を及ぼすか、実例をあげて説明してみよう。

##### (1)鉛化合物の人体への影響

従来から職業中毒のうちの最も重要なものとされてきたが、昭和45年5月、東京都新宿柳町の自動車排気ガスによる人体影響の調査から、職業病としての労災保障認定基準(血液100ml中の鉛濃度0.06mg、尿1l中0.05mg)を越えているものがあつたところから社会問題化した。水溶性の硝酸鉛、酢酸鉛、塩化鉛や、水に不溶で体液中に溶ける酸化鉛、鉛丹、炭酸鉛、水にも体液中にも溶けないクロム酸鉛、亜硫酸鉛も中毒を起こす。

まれではあるが大量の鉛が体内に入ると急性中毒を起こし、腹痛、嘔吐、下痢等が現われ、激烈な胃腸炎と、その結果起こるショックのため死亡することもある。また鉛に換算して毎日5~10mgを3~4週間、内服するか、その他、経皮的にも、また呼吸によっても吸収され、慢性中毒を起こし、食欲不振、便秘、頭痛、貧血、関節痛、四肢のまひ、神経障害等を起こす。門歯の周囲、歯肉の帯青色になる鉛線は特有な症状である。

##### (2)カドミウムの人体への影響

富山県神通川流域に発生したイタイタイ病の原因として慢性のカドミウム中毒として注目された物質である。イタイタイ病は、カドミウムの蓄積により、腎尿細胞の再吸収機構が阻害され、カルシウム不足から体内カルシウムの不均衡が生じ、身体中の骨がゆが

んだり、ひびが入ったり、場合によっては、セキをしたただけで、ろっ骨が折れたりする悲惨な病気で、患者がイタイタイと訴えるところから、地元開業医萩野博士によって命名された。誘因としては更年期や老化、妊娠、授乳などによる内分泌の失調が考えられる。推定死亡者 119人、現在の患者数約 230人、昭和45年5月、国は正式にカドミウムによるものという説を取り入れた。

(7)おわりに

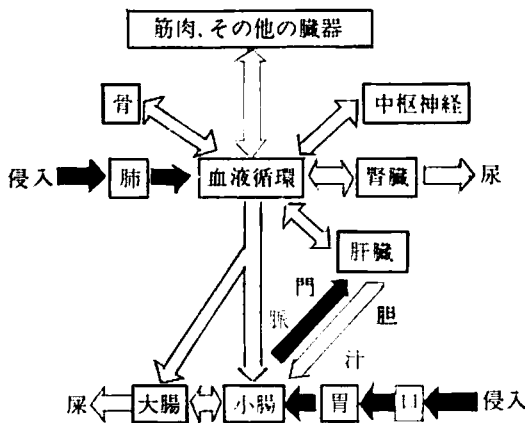
ここでとりあげたものは、公害(害)と名のつくものすべてからみれば、「ほんの一部。にすぎないのである。公害問題にどの様に立ち向かって行くか。それは、決して、ごく一部の者に与えられた課題ではなく、我々みんなが真剣になって考え、対処していかなければならない身近な問題なのである。

注 「公害」という言葉は、これまで社会用語とし

て使用されてきており、その言葉によって意味する範囲は、人為的現象による被害であるという点を除けば人によって相当の差意があった。公害対策基本法においては、その第2条で「公害」を「事業活動その他の人の活動に伴って生ずる相当範囲にわたる大気汚染、水質の汚濁(水質以外の水の状態、または水底の底質が悪化することを含む)、土壌の汚染、騒音、振動、地盤の沈下(鉱物の採掘のための土地の掘さくによるものを除く)、および悪臭によって人の健康または生活環境に係る被害が生ずること」と定義し、「生活環境」には、「人の生活に密接な関係のある財産並びに人の生活に密接な関係のある動植物、およびその生育環境を含む」とされている。

参考資料 「公害と対策」第8巻第6号(1972)  
「PPM特集」 '73年版

図一 肺および口から侵入した金属の生体内移動



表一 人間1日当りの鉛摂取量と吸収量

鉛の供給源	摂取量	鉛濃度	鉛摂取量	吸収量
食物	2 kg	0.2 ppm	400 $\mu\text{g}$	20 $\mu\text{g}$
水	1 kg	0.01 ppm	10 "	1 "
都市の空気	20 m <sup>3</sup>	1.3 $\mu\text{g}/\text{m}^3$	26 "	10 "
農村の空気	20 m <sup>3</sup>	0.05 $\mu\text{g}/\text{m}^3$	1 "	0.4 "
タバコの煙	30本	0.8 $\mu\text{g}/\text{本}$	24 "	10 "
計			461 $\mu\text{g}$	41.4 $\mu\text{g}$

表二 人間1日当りのカドミウム摂取量と吸収量

品目	摂取量	カドミウム濃度	カドミウム摂取量	吸収量
食物	1.2kg	00.67 ppm	80.4 $\mu\text{g}$	4.0 $\mu\text{g}$
水	1 kg	0.002 ppm	2 $\mu\text{g}$	0.1 "
空気	20 m <sup>3</sup>	0.012 $\mu\text{g}/\text{m}^3$	0.24 "	0.08 "
紙巻タバコ	20 本	0.6 $\mu\text{g}/\text{本}$	12 "	3.6 "
計			94.64 $\mu\text{g}$	7.78 $\mu\text{g}$

## 新着図書目録

図書館のみ所在する図書を  
分類別受入順に記載

### 総記

梅村忠夫

岩波新書 722	岩波書店
知的生産の技術	
東洋文庫 238 (十二支考3)	平凡社
239 歳時三百首1)	同
240 日本農地紀行	同
241 日本神話伝説の研究	同
朝日新聞縮刷版 48-7	朝日新聞社
同 48-8	同
同 48-9	同
Modern Century Illustrated Encyclopedia Vol 1 A-ANT	
同 Vol 2 ANT-BAG	
同 Vol 3 BAH-BOT	

同 Vol 4 BOT-CAN	上田吉一		
同 Vol 5 CAP-CLE	完全なる人間		誠信書房
同 Vol 6 CLE-CRO	G. W. オルボン		
同 Vol 7 CRO-EAR	人格心理学上・下		同
同 Vol 8 EAR-FIN	相場均 体格と性格		文光堂
同 Vol 9 FIN-GIL	相良・小川		
同 Vol 10 GIR-HON	パーソナリティの力学説		岩波書店
同 Vol 11 HON-IVO	川喜田二郎		
同 Vol 12 J-LIE	中公新書136 発想法		中央公論社
同 Vol 13 LIE-MED	中山正和 同 174 カンの構造		同
同 Vol 14 MED-MYT	中村秀吉 同 297 パラドックス		同
同 Vol 15 N-NUR	源了円 同 312 徳川思想小史		同
同 Vol 16 NUR-PEN	中堅肇 同 322 弁証法		同
同 Vol 17 PEN-PRE	シンボジウム日本の神話		
同 Vol 18 PRI-RHI	1 国生み神話		学生社
同 Vol 19 RHO-SEC	2 高天原神話		同
同 Vol 20 SEE-SPA	3 出雲神話		同
同 Vol 21 SPA-THA	デカルト著作集 第1-4巻		白水社
同 Vol 22 THA-VAN	西谷啓治 講術 神		
同 Vol 23 VAN-WOR	1 神の立場		筑摩書房
同 Vol 24 WOR-ZOO	2 神の実践		同
	3 神の歴史—中国—		同
	4 同 —日本—		同
	5 神と文化		同
	7 神の古典—日本—		同
	山本信 講座哲学		

### 哲学

1 哲学の基本概念 東京大学出版会  
大森荘蔵  
2 世界と知識 同  
城塚登 3 人間の哲学 同  
小倉志拝  
4 価値の哲学 同  
日本人の宗教  
1 情念の世界 佼成出版社  
2 儀礼の構造 同  
3 近代との邂逅 同  
講座 日蓮  
1 日蓮と法華経 春秋社  
2 日蓮の生涯と思想 同  
3 日蓮信仰の歴史 同  
4 日本近代と日蓮主義 同

茅野良男  
認識論入門 (講談社現代新書) 講談社  
キルケゴール著作集  
1 あれが、これが、第一部① 白水社  
2 同 同 ② 同  
3 同 第二部① 同  
4 同 同 ② 同  
5 おそれとおののき・反復 同  
6 哲学的断片・危機 同  
7 哲学的断片への結びとしての  
非学問的あとがき ① 同  
8 同 ② 同  
9 同 ③ 同  
10 不安の概念・序文ばかり 同  
11 死にいたる病・現代の批判 同  
12 人生行路の諸段階 ④ 同  
13 同 ⑤ 同  
14 同 ⑥ 同  
15 愛のわざ 第一部 同  
16 同 第二部 同  
17 キリスト教の修練 同  
18 わが著作活動の視点 同  
19 瞬間・自らを裁け 同  
20 イロニーの概念① 同  
21 同 ② 同  
別巻 キルケゴール研究  
原富男 現代語訳 孟子 春秋社  
同 同 莊子 同  
同 同 老子 同  
同 同 論語 同  
増谷文雄 同 正方眼蔵 第一・二巻 角川書店

## 歴史

朝日新聞に見る日本の歩み  
一焦土に築く民主主義 I・II 朝日新聞社  
渡辺光 他編  
世界地名大事典  
ヨーロッパ・ソ連 I・II・III 朝倉書店  
兼清正徳  
人物叢書 168 香川景樹 吉川弘文館  
海音寺瀧五郎  
日本史探訪 9 角川書店  
論集 日本歴史 9 明治維新 有精堂  
直木孝次郎  
日本の歴史 I 倭国の誕生 小学館  
いわき地方史研究会  
いわきの歴史 マルトモ書店  
いわき市史  
5 自然・人文 いわき市

## 社会科学

福田恒存  
言論の自由という事 新潮社  
銀林・他

ゲームの理論と経済行動 1-5 東京図書  
寺田・日高  
人類文化史 I 人類の創世記 講談社  
総合講座  
日本の社会文化史 I 同  
芸史研究会  
日本庶民文化史料集成 6 歌舞伎 三書房  
矢田部達郎 岩波現代叢書  
生産的思考 岩波書店  
川喜田二郎  
中公新書 210 続・発想法 中央公論社  
中岡哲郎 同 234 人間と労働の未来 同

## 自然科学

岸本康 ブルーバックス  
B-213 生命をつくる物質 講談社  
本間龍雄  
B-214 新しいトポロジー 同  
都筑卓司  
B-215 「力」の発見 同  
大島泰郎  
B-216 生命の誕生 同  
前田・他  
教理計画法入門 1・2 東京図書  
日野寛三  
現代統計学の基礎 1・2 同  
電気学会大学講座  
誘電体現象論 電気学会  
永井洋一郎  
構造有機化学入門 朝倉書店  
漆原義之  
有機化学命名法要説 同  
山崎文男  
実験物理学講座 26 放射線 共立出版  
中崎昌雄  
工業化学基礎講座 4 有機化学 朝倉書店  
「物性」実験技術シリーズ 別巻  
実験室での事故を防ぐには 積書店

## 工学

昭和48年電気四学会連合大会講演論文集 (1-10)  
電気四学会常置連合大会企画委員会  
中村伸・他  
誰でもわかる建築の構造計算 I 技報堂  
田治和辰雄・他  
誰でもわかる建築の構造計算 II 同  
谷資信 やさしい構造計算シリーズ  
1 構造計画から設計・計算へ 理工図書  
同 2 荷重・外力 同  
木下洋三郎  
撓角法によるラーメン公式集並びに用法 理工図書  
宮入庄太  
エネルギー変換工学入門① 丸善  
小山恒夫・樋浦正  
電気・電子材料の物性 学苑社  
大西久治  
JISにもとづく電気製図法 理工学社  
中山正和  
中公新書 299 発想の論理 中央公論社  
北川敏男 同 298 創造工学 同  
小森清司  
建築構造学大系 11 平板構造 朝国社  
響電貢 新編電気工学講座 23 電気製図 コロナ社  
左治本清六  
電気製図見方と書き方 電気書院  
社団法人高圧ガス保安協会  
甲種受験用 高圧ガス工業技術 共立出版  
浅原照三  
新しい世界を切り開いた石油化学工業 東京化学同人

## 芸術

猪飼道夫  
現代トレーニングの科学 大修館書店  
同 種目別現代トレーニング法 同  
浜田靖一  
図説マット運動 新思潮社  
同 図説徒手体操 同  
宇野雪村・梅好通  
入門書道全集 別巻  
毛筆五体漢字字典 実業の日本社

## 語学

日本語大辞典  
5 かつまーきにん 小学館  
6 きぬーくるん 同  
早川光三郎  
新訳漢文大系 58 要求 (上) 明治書院  
同 同 59 同 (下) 同

## 文学

司馬遼太郎全集  
3 竜馬がゆく I 文芸春秋  
4 同 2 同  
5 同 3 同  
6 燃えよ剣 同  
7 新選組血風録・幕末 同  
9 功名が辻 同  
13 浪一浪華遊快伝一 同  
14 関ヶ原 I 同  
15 同 2 豊田家の人々 同  
16 11番目の志士・風の武士 同  
17 新史太閤記 同  
18 夏草の賦・戦雲の夢 同  
19 峠 I 同  
20 同 2・峠って侯・最後の將軍 同  
21 義経 同  
23 歳月・殉死 同  
24 坂の上の雲 I 同  
25 同 2 同  
26 同 3 同  
チエーホフ全集 1-10 小説 中央公論社  
11 戯曲 I 同  
12 同 2 同  
13 シベリヤの族・サハリ島 同  
14 戯曲 3・小説精選・手帖・日記 同  
15 書簡 I 同  
16 同 2 同  
現代日本文学大系  
28 若山牧水・他 筑摩書房  
67 金子光晴・他 同  
筑摩世界文学大系  
31 ゴーゴリ・レールモントフ 同  
32 キルケゴール 同  
35 ホーソン 同  
76 ショーロホフ 同  
77 ショーロホフ II 同  
明治文学全集  
32 文学雑誌・文学界集 同  
現代日本キリスト教文学全集  
4 愛と孤独 教文館  
昭和国民文学全集  
1 吉川英治集 筑摩書房  
10 山本周五郎集 同  
現代の文学  
22 長谷川四郎・関高健 講談社  
日本近代文学大系  
41 久保田万太郎・山本有三 角川書店  
54 近代詩集 II 同  
55 近代短歌集 同  
折口全集 第 17・18 巻 中央公論社  
藤村全集 2 巻・7 巻  
新田次郎  
アルプスの谷・アルプスの村 新潮社  
遠藤周作  
死海のほとり 同